

## 2016 県展 講評

### 1 絵画部門

#### 【総評】

高齢者の作品には歴史をふまえた力強さがあり、入選数も多くパワーを感じた。若い世代の作品には発想の斬新さがある。技術が高く、感性が生き生きしている作品が多い。「絵画」という大きなくくりの中で様々な傾向があってスタイルも幅広いが、特に具象的な作品の追究を感じた。今後への希望：絵の具そのものが生命力を持つような作品を期待する。今年は細かい描写をした作品が多数入選したが、もっと大きな画面でおおらかな表現ができるものがあったら良いのでは。県展はバラエティに富む面白さがあるので、自分の追究するものを画面の上で成り立たせる素材の使い方や構成を進めてほしい。

#### 【県展大賞、部門大賞・知事賞】《a green window》

絵の具の層はさほど重ねてないにも関わらず、遠くから見た構成・奥行き感は作り込まれていて断トツに空間性がある。素材の持ち味を生かしているが、ただ額がもったいない。色調が良く混色もさまざまに豊か。一見スーパーリアリズム的だが、それ以上に自然を掴んでいて、良い意味で気味の悪い空間が広がっている。不気味さがうまれていて魅力的。視線が奥に吸い込まれるも手前の描写に引き戻され、自然と視線が動く。

#### 【兵庫県立美術館賞】《囚ワレタ向日葵ノ図》

ルーヴル美術館蔵のアンゼラム・キーファー作品を彷彿とさせる。オーソドックスなテーマを使いつつも現代的な解釈がなされている。惜しいのは空間表現で、もう少し細部描写で魅せることもできた。自分のひらめきと現代性をうまく組み合わせた秀作。行き場のない閉塞感、場所のストーリーをぎゅっと詰め込んでいて、今の世の中を強く感じさせる。壁龕のような表現の中に、生命の終わりを象徴するようなものがうまく出ている。

#### 【神戸新聞社賞】《樹のある風景 2016》

落ち着いて静かな画面の中に、ゆるぎない生命力と圧倒的な強さを具えており、牛島憲之の流れを汲む伝統的な技法が使われている。この大きさがガツンと生命力を出している点は若い世代も見習うべき。幹をスパッと切っている水平感は、地平線の広がりや木の上部の立体感との組み合わせを配慮しても良いのかもしれない。あえて木の位置を左にずらすことでバランスの悪さを出していて、空間が絶妙に気持ち悪くなる。

#### 【芸術文化協会賞】《季節の送り状》

背景の金箔とドライフラワーとの対照が、生と死の組み合わせをうまく表している。背景がもう少し熟考されていたら良かったが力作だし、説得力がある。乾いた葉の質感を深く追求していて絵としての魅力につながっている。日本画の素材に長けており、構図がうまく、植物の配し方や背景の流れる感じが良い。巧みにマチエールが作られている。

## 2 彫刻・立体部門

### 【総評】

木彫から石彫まで、多岐にわたっている。具象も抽象も、自分なりのテーマを設定して、素材を駆使しており、バラエティに富む。県展の応募者はプロを目指す方から趣味として楽しむ方まで幅広く、制作姿勢が意欲的であるものを選んだ。物足りない部分もあり、もっと元気でもよいのではと思う。

来年応募される方へ：昔は量感、空間、動静といった彫刻の要素で勝負しようとしていたが、彫刻という分野、既成のものから離れようとする新しい試みがみられる。規則的にだめなものはない世界であり、自由に、どんどん挑戦すればよいと思う。存在感、緊張感など、押さえるべきところは押さえ、思いつきに終わらないようにしてほしい。

### 【部門大賞・知事賞】 《I was here》

純粹で素朴、実直。真っ向から木という素材に向き合おうとする姿勢が表れている。もっと細かいところまで、いろいろなことをしたくなるが、ちょうど良いところで止まっている。タイトルからして自刻像だろう。断定的でなく、作品を見る側が考えられる余地を残している。オーソドックスな彫刻を作る人は減っているが、作者はそれに挑んでいる。

### 【兵庫県立美術館賞】 《harvest 01》

即物的な優しさと、血管のようなグロテスクさを兼ね備え、素材感とかたちが奇妙な雰囲気をもし出す。素材として紙を用いているが、手芸的にはなっていない。先端にはそれぞれ異なるかたち、動きが見られ、空間性や広がりがある。今後が楽しみである。

### 【神戸新聞社賞】 《瀬戸内風の夷曲》

軽さを表現しているのだろうか。動きそうなものが動かず、動かなさそうなものが動く。ぶら下がっている白いものが動いたほうがおもしろい。以前の作品からさらに展開しており、自分だけの表現、その人だとすぐに分かる作風が確立されつつある。

### 【兵庫県芸術文化協会賞】 《南極難民》

手法としては流木を削る、磨く、色をつけるという作業をしており、自然のものを活用した作品。かたちから何かをイメージできるのが彫刻の要素。見る者の想像力が高められ、作品と対話できるのが楽しい。内部が抜けていて、軽いのもよい。

### 3 工芸部門

#### 【総 評】

昨年より応募点数は少なかったということだが、全体的なレベルは高い。地道な努力の痕跡が作品に現れ、伝統工芸の技術を踏まえつつ、既成概念にとらわれない新鮮で自由な表現を広げようとする意図が感じられた。

#### 【部門大賞・知事賞】《生かされる》

土の巻き締めによる素焼きのオブジェ。素材と格闘しながら有機的なフォルムを生み出している。従来の型にはまることのない自由な創作によるもので、もはや工芸なのか立体オブジェなのか、ジャンル分けそのものを超越していく将来性を秘めた作品。

#### 【兵庫県立美術館賞】《誘う珊瑚礁》

ガラスによるオブジェ。ガラスという素材を型にはめ込む仕方でなく、溶けたガラスによって自らの求めるフォルムを導き出す自由さが感じられる。装飾とおおらかな造形感覚が調和し、透明感や色彩感も良い。

#### 【神戸新聞社賞】《精霊》

絞り染め。大きな絞りの左右を断ち切り、花火や花を想起させるかのような優れた造形感覚を示している。伝統的な染めの技法に従いながら、その労苦や手垢感を思わせない端正な仕事を高く評価する。色彩感覚も良い。

#### 【芸術文化協会賞】《宙吹切子皿「輪宝・太陽」》

カットグラス。やはり従来の切り子の技法を駆使しながら、その縁に太陽を思わせる自由な曲線処理を施すことで、伝統と一線を画した自由で現代的なフォルムが生み出されている。試行錯誤がうまく造形に生かされた作品。付属の台は蛇足。ない方がよほど良い。

#### 4 書部門

##### 【総評】

昨年より出品点数も増え、レベルも例年と比べて全体的に高い。師の作風をそのまま継承するのではなく、自己の世界を確立して出品している作品が多く見受けられる。良い傾向。あとは作品の顔ともいえる表具に、各出品者はいっそう気を配ってほしい。

##### 【部門大賞・知事賞】《ゆらぎ》

前衛。横画面の左から右へ、筆致が激しく動く一方、余白のバランスが絶妙に取れており、リズム感が目に心地よい。

##### 【兵庫県立美術館賞】《あひみての》

かな。墨の濃淡やかすれの部分によって表現が全体に柔らかくなっている。表具の青色と墨の色とのバランスもうまく調和が取れている。線もしっかりと出ており、日々の勉強の成果が見られる。

##### 【神戸新聞社賞】《元好問詩》

漢字。他の作品に比べて字が小振りであるが、線が力強く行間とのバランスが取れているので弱々しさを感じさせない。明清期の書をほうふつとさせる。

##### 【芸術文化協会賞】《白居易詩》

太くはないが厳しい線が縦横無尽に行き交い、力強い躍動感にあふれている。重苦しさを感ぜさせない。

## 5 写真部門

### 【総評】

全体的に新しさが感じられず、同じことの繰り返しが多かったのが残念だった。一定以上のレベルには達しているが、個性や作家性が感じられる作品が少なかった。スナップの写真が少なかったのも印象的であった。しかし、作家の意図や造形的な考え方が出やすい三点組の作品が多かったのはとてもよかった。フェイスブックやインスタグラムが流行するなかでクオリティの高い1点の写真を目にする機会が増えたが、こうした三点組みは「何を表現したいか」ということを示していた。写真によって何を表現したいかというのは人それぞれであるが、自分が為すべき表現にむかって突き進んでほしい。

### 【部門大賞・知事賞】《標本》

写真というのは「発見の美学」である。本作はこの「発見」の分母がとても多かったはずである。描写力も的確であり、あらゆる細部を映し出すことに成功しており、光の使い方も良い。また人間のトルソ、脚のように素材を選定し、切り取っているのがとても面白く、極めて完成度の高い作品である。

### 【兵庫県立美術館賞】《夢空間》

スナップ的な要素が強い作品である。偶然の助けを借りて、現実的でありながら非現実的な世界を写し出しているのが良い。子供たちは楽しんでいるようでもあるが、画面には不思議の国のアリスのような少し怖い印象もある。一方で、光が効果的に用いられ、また絵画性に満ちた構図が採られていることにより、まとまりのある画面になっている。

### 【神戸新聞社賞】《変貌》

三点の画面に選ばれたモチーフの組み合わせが良い。四角、丸、不定形といったかたちや、金属、ゴムといった物体が画面に写し出されている。日常では気づかないようなこれらの物体によって構築された画面は、我々に「時間」を意識させるとともに、何らかの隠されたメッセージさえも想起させるものとなっている。

### 【芸術文化協会賞】《虹色のラッピング》

「写真は真実を写さない」ということを明らかにするような作品である。カメラの技術、レンズ、窓ガラスの効果だけに頼っている作品ではなく、作家ならではの都市、空間の捉え方が表現されていて良い。一方で、時間や空間をすり抜けてしまうような独特の世界が写しだされている。

## 6 デザイン部門

### 【総評】

絵画ないしイラストレーショナルな作品が多く、機能をもったオブジェという意味でのデザイン作品、例えばテキスタイルやファッション、プロダクトの類のものが少なかった。デザイン都市をうたう神戸であるので、今後はデザインというジャンルに対する理解が浸透し、多様な作品の応募があることを期待したい。

### 【部門大賞・知事賞】該当なし

### 【兵庫県立美術館賞】《間奏曲》

画面の隅々まで神経の行き届いた作品。デザインというジャンルの作品として考えた場合に絵画としてみるかイラストレーションとしてみるかという点で不明瞭な部分があり、二席にとどめた。デザイン的な要素ないしイラストレーションとしてのオリジナリティがもっとあれば良かっただろう。

### 【神戸新聞社賞】《ゆらびた stool》

アイデアとしては既にありそうなものではあるが、唯一のプロダクトデザインということもあり、奨励の意味も込めて受賞作とした。目的と機能というコンセプトに対して的確な作品となっている。

### 【芸術文化協会賞】《グラデーション》

デザインとしてみるかコンセプトチュアル・アートとしてみるかの判断が難しい作品であった。アクリルケースのデザインやフォントなどにこだわりを持ってもらうとデザイン性はいっそう上がるだろう。問題の発見とその解決というのがデザインの本領であるが、本作は問題の発見を指し示している点で評価されるが、その解決を提示できなかった点は残念であった。